

空白のボタン たなか踏基

あんなに激しかった夏、時に35 を越える寝苦しい熱帯夜は一体何処に消えたのであるつか？

パーシーフェイスオーケストラの「夏の日の恋」やサーカスが唄った「MR・サマータイム」の旋律がふと心を過ぎる。今年も大型台風十一号、十四号が、日本列島を襲い被害をだした。「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉どおり、九月中旬にもなると、流石に朝晩の冷気を感じるようになった。

虫の声はとくに秋の到来を告げて鳴いていたのだが、地球温暖化現象下の影響でか、昨今の蒼い星の気儘な天候は実に気紛れである。家内が「三寒四温という言葉は、冬から春にかけてあるが、秋の場合は何というの？」と問うのだが、私は昨今の暑さ寒さを繰返すこの異常気象には、はたと戸惑い応えられず口籠ってしまう。TVの氣象予報士泣かせの昨今の天候である。

随想録にしる小説にしる、夏の暑い盛りの日中の執筆を避け、元来朝型執筆の習慣が、何時の間にか私の生活のリズムになっていた。早ければ午前三時頃に起床し、朝食前まで一人パソコンに向う。朝食後、TVを観ながら十時頃まで仮眠する。特に夕飯後の就寝までの間に執筆を続けると、脳が興奮するのか寝付きも悪く睡眠も浅くなるので夕飯後の執筆はだんだんやらなくなっていた。

「奇妙な」シリーズ第二弾「奇妙な猫たち」「新雪国幻想」の二つの短編の原稿を、八月初旬に文芸社の編集部に預け、初校ゲラ待ちの間、私は早くも第三弾「奇妙な紀行文」執筆にかまけていた。紀行文作家で、プール仲間の自費出版の本を、読んだ時から、共著で推理小説を書いてやろうと思ひ、密かに中山道を、特に木曾を舞台にし

た事件の構想を練っていた。木曾と思つたのは、紹介を受けたジャーナリスト、梅本浩志氏著の『鳥崎こま子の「夜明け前」』という本に影響を受けたためだと思う。編集担当者の、初校は九月中旬から下旬頃になるとメールで連絡が入った。

「奇妙な紀行文」の骨子を紀行文作家と相談して固めると、九月上旬より一気加勢に執筆し始めた。筆が走るとは、このことをいうのであるうか。「奇妙な」シリーズ三作目にもなると、脳と手の連携がスムーズになり、今迄以上に言葉が浮んだ。浮ぶ言葉を手の指に委ねるだけである。

私はパソコンのキーボード操作も、年齢の割りには早い方だと自信があつた。快調な時は、原稿用紙に換算して、七八枚位を三時間位で書き飛ばす。文章を思い付くと、指が自動的に連動してキーを叩いている。テニオ八を完全に無視して、脳裏に浮ぶフレーズを、ランダムにパソコンの画面上に並べていく。後で推敲しながら、フレーズの並べ替えとテニオ八を直して再構成する。

全く便利な機械ができたものと感謝している。時々パソコン執筆の失敗は誤字である。誰でも、パソコン使用の物書きはそうであるうが、変換文字の間違いに気付かないで平気であることが多い。パソコンは漢字を忘れさせる道具でもある。

執筆が快調になると、運動不足を避けるために、私は家内の忠告も入れ、午後プールでの水泳と、朝食前の短時間のジョギングに心掛けるようになった。中々上達しないダンスも、金曜日個人レッスンと土曜日団体のダンスを欠かさなかつた。

「奇妙な紀行文」は、共著であつたので同一画面上で眺めた時に、紀行文の文体に負け、自分の文体を忘れてるように思える錯覚が起きた。推理小説のストーリーが、紀行文の迫力に引き摺られるのである。そこで私は、出来るだけ最後まで

冷静に紀行文作者の文を読まないようにして、自分の何時ものペースで執筆しよう心掛けた。

紀行文作家から「この小説の事件のトリックと紀行文との関係はどうするのですか？」問われた。ジャクジープールで、共著の作家と逢う度に、苦言めいた質問に犯人は誰々だと応えて釈明した。「最後に、了解を得て紀行文の文章を、小説ストーリーに合せて修正します」と告げた。まるで、視覚のポケットに嵌り込んで忘れ去られた、元のままの紀行文の状態が長い間続いたためである。紀行文作家の質問は、作者として当然であつた。

九月の中旬には、原稿用紙換算で三百二十枚ほどの作品が略脱稿した。私の創作活動上でも、これだけの枚数に相当する作品執筆は、今回が初めてであつた。題名「奇妙な紀行文」となるよう、謎解き部分と関係付けたトリックを紀行文の上に配した。二つの暗号文と、主人公の怨嗟の想いや、尾行者から追われる心理描写等である。

脱稿してみても、心が空になるのを感じた。

沢山の言葉を脳裏から短時間に掻き出すと、どうやら人は一時的に空白の状態に陥るものらしい。まるでそれは、青春時代に引越しの済んだ寮自分の部屋の畳の上に、落ちている赤いボタンに気付いた時の心境であつた。それまでは、唯自分の視覚の影に紛れ込み、見えずに拾われなかつたボタンだったからである。今窓から斜めに射し込む満月の光の中、忘れてきた昔の赤色のボタンを、心の裡に発見して私は戸惑っていた。

九月十八日の今夜は、中秋の名月であるとTVの氣象予報士が解説していたので屋外に出て、十五夜の月を久しぶりに眺めた。良夜、十六夜、立待月、居待月、寝待月・等一連の月に関する俳句の季語が心に浮んだが、俳句は詠まなかつた。